

愛する兄弟ラザロが死に、悲しみの只中にあるマルタとマリアの所にイエスが来ました。イエスの時代、死者の魂は死んで三日間は死んだ肉体から離れることなく漂い、四日たてば魂は去っていくと考えられていました。イエスは完全に死んだラザロを復活させるために来たのです。ヨハネ福音書の書かれた時代には、死者の復活を否定するサドカイ派は消滅し、ユダヤ教はファリサイ派ユダヤ教となり、終わりの日に死者が復活することはユダヤ教の公式の教義となっていました。マルタは信心深いユダヤ教徒として、24 節で復活信仰を告白しています。これに対してイエスは「私が復活なのだ。私が死によって終わることのない命なのだ。だから、私を信頼する者は肉体の死によってすべてが終り滅ぶということがないのだ。」と言ったのです。イエスが復活であり、命そのものなので、このイエスを信頼する者は「死んでも生きる」こととなります。「私を信じる者」は、原文では「私の中へ信じ入る者」という表現が用いられています。イエスを信頼し、イエスの中へ自分を投げ入れ、イエスと共にある者ということです。イエスを信頼し、イエスとの愛の交わりに生きる者は、既にイエスと一つにされ、イエスの命、イエスの復活の命の中に生かされているのです。パウロは、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。」(ガラ 2:20)と語っています。この言葉は、イエスの復活の命の中に生きる者とされた人の言葉です。キリスト者であるということは、何か体系的なキリスト教の教えを信じているということではなく、今生きて働くイエス・キリストという人の命に生きている、この人と共に生きているということなのです。イエスは将来の復活を頭で信じていたマルタに向かって、「私を信じるということは、既に私の命の中にあり、肉体の死をもってしても破られることのない命に生きているということなのだ、あなたはこのことを信じるか」と問うたのです。そして、そのことを信じさせるために、イエスはラザロを復活させたのです。26 節の「このことを信じる」とは、イエスが永遠の命へと復活した神の子であることを信じることと同じなのです。27 節のマルタの告白には初期の共同体の「神の子キリスト」の告白が重なっていると考えられます。マルタは見ないで信じる信仰を告白しているのです。

私たちの信仰告白の上に、私たちの救いがあるわけではありません。イエスが既に永遠の命の主として立っていることが根本的に大事なのです。私たちはそれに「はい、主よ、信じます」と応答するだけです。私たちの手の内にはではなく、イエスの手の内に、私たちの命、救いがあるのです。